
仮面ライダーW&TIGER&BUNNY

フルフル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーW & TIGER & BUNNY

【Nコード】

N7975Z

【作者名】

フルフル

【あらすじ】

風の吹く街・風都。

その風都を守るヒーローとして活動する戦士。

仮面ライダーW。

Wは風都で起こる怪現象を探っていた。

「同じ人物が複数あらわれる」

という現象だ。

そして捜査を続けるうちにあるドーパントにたどり着く。

「パラレルワールドドーパント」

平行世界の記憶を封じたガイアメモリだ。

悪の蔓延る街・シュテルンビルト。

そのシュテルンビルトを守るヒーローとして活動する戦士。
ワイルドタイガー。

シュテルンビルトでは過去にない大事件が起きていた。

「複数のバーナビーが悪事を働いている」
というありえない事件だ。

タイガーは捜査を続け、あるNEXTにたどり着いた。

「アルネイト・ライナス」

その能力は「普通ではない能力をコピーできる」能力だ。

そして、数々の偶然が重なり、2人は出会ってしまふ。

「仮面ライダーW、ハードボイルドに行くぜ！」

「ワイルドタイガー、ワイルドに吠えるぜ！」

時空を超えて闘うヒーロー。

始まります。

く現れたEノ平行世界のライダーく（前書き）

ダブルとタイガーのクロスオーバーとなります。

時空を超えて、とかは有り触れてるかもしれませんが。

よろしく願います。

「現れたEノ平行世界のライダー」

？仮面ライダーWの次元？

場所は風の吹く街・風都。

その街にある一つの探偵事務所。

ドアを開ければ20畳ほどの空間に、センスを感じるインテリア。
数個の帽子のかかる隠し扉、タイプライターの置かれたデスク。

そんな鳴海探偵事務所で、2人の人間が口論を交わしていた。

「いい加減にしろ！お前も探偵なら手掛かりの一つくらいさっさと
見つける！」

青いジャケットを着た、若い青年が叫んだ。

彼の名は照井竜。

風都署の警察で、仮面ライダーアクセルとして風都を守る戦士だ。

「そつちこそ！警察の方が得られる情報は多いだろうが！」

ネクタイに黒いハット帽子をかぶった青年も声を上げた。

彼の名は左翔太郎。

この鳴海探偵事務所の探偵であり。

仮面ライダーダブルとして風都を守る戦士。

現在、2人はある事件の情報交換を行っていたのだが。

お互いが殆ど有力な情報を得られなかったために言い争いが起きていた。

2人の追いかけるある事件とは「同一人物が同時刻にあらゆる場所で見かけられる」

という奇っ怪な事件だ。

2人はこの事件にガイアメモリが絡んでいると確信し、独自に捜査を行っていた。

そして現在に至る。

「フィリップの検索はどうした？」

「今も検索中だ、だが手掛かりが少なすぎて絞りきれねえみたいだ」
フィリップというのは翔太郎の相棒である。

「そうか・・・だがガイアメモリが関わっているのは確かだな」

「ああ、じゃなきゃ同じ人間が何人も現れるなんて有り得ねえ」

「俺は署に戻る。引き続き捜査を頼むぞ、左」

「任せとけ」

そう言うと照井はドアに手をかけ、出ていこうとしたが。

「失礼するぜ」

ドアの向こうから誰かの声が聞こえた。

そして照井がドアを開くより先に、向こうから開いた。

「っ………貴様っ！」

照井は声の主に掴みかかろうとした。

「おっと」

声の主は軽々と照井をかわし、事務所内に入った。

その人物は照井も翔太郎も知る人物だった。

「よう、過去の仮面ライダー達」

声の主はそう言うと、腰にロストドライバーを当てた。

「お前は……大道克己………っ！」

大道克己。

不死の兵士NEVERとして改造された不死身の男。

ある事件で「エターナル」のガイアメモリを手に入れ、仮面ライダーエターナルとして闘った。

そして最後は風都で大事件を起こし、ダブルとの決戦の後に消滅した。

つまり、今日の前にいるということは有り得ないことだ。

「お前、どうしてここにいるんだ………」

翔太郎は克己を倒した張本人なのだ。

当然の疑問と言えるだろう。

「どうでもいいだろ？そんなことは」

そう言い終えた克己は懐から何かを取り出した。

それは「エターナル」のT1ガイアメモリだった。

♡ E T E R N A L ! ! ♡

永遠の記憶を封じたガイアメモリだ。

ガイアメモリのボタンを押し、ガイアウイスパーから音声が流れた。

「変身」

♡ E T E R N A L ! ! ♡

ガイアウイスポーの音声と軽快な音楽と共に、克己の身体が白い装甲で包まれた。

「仮面ライダー・・・エターナル」

克己は変身後にそう名乗った。

翔太郎は目の前の克己が本物であることを確信した。

「左！何をボーツとしている！」

照井もアクセルドライバーを腰に当てた。

ベルトが腰に装着され、懐から紅いガイアメモリを取り出した。

そしてボタンを押し、ガイアウイスポーから音声が流れる。

「ACCEL！」

加速の記憶を封じ込めたガイアメモリ。

「変・・・身っ！」

「ACCEL！」

ガイアメモリの音声とエンジン音のような音楽が流れる。

そして照井は紅い装甲に包まれ、仮面ライダーアクセルとなった。

「地獄から迷いでたかつ！」

アクセルは大型の剣、エンジンブレードでエターナルに切りかかった。

「見せてみる、この世界の過去のライダー」

エターナルはブレードを身軽に交わし、窓を突き破り外に出た。

この世界の・・・？

翔太郎はその言葉に疑問を抱いた。

そして、場所は工場跡。

「ハアっ！」

アクセルはエンジンブレードを力の限り振り回す。

エターナルは体技を駆使して、かわすか、受け止めるか。

とにかく防御に徹していた。

「いい感じだ。もっとこい」

挑発するかのようにアクセルに手招きをするエターナル。

「舐めるなっ！」

すると、アクセルは少し形の異なる黒いガイアメモリを取り出した。

「TRIAL！」

挑戦の記憶を内蔵したトライアルメモリだ。

「変・・・身っ！」

「TRIAL！」

カウントダウン音声の後にバイクのスリップ音のような音楽が響いた。

そしてアクセルの紅い装甲が弾け、黄色に。

そして青色に変化し、スリムな体型のライダーに変わった。

この超高速形態こそがアクセルトライアルだ。

「ほう・・・？面白いつ！」

エターナルは今度は攻撃に転じた。

小型ナイフのような形の武器、エターナルエッジを構えて切りかかる。

しかし、超高速で移動するアクセルトライアルには掠りもしない。

「そんなものが当たるかつ！」

アクセルはトライアルメモリの形を変化させた。

「TRIAL! MAXIMUM DRIVE!」

マキシマムドライブとはガイアメモリの力を最大限引き出す事である。

ストップウォッチ形に変化させたトライアルメモリのスタートボタンを押した。

「ハアアアアアっ!」

超高速で繰り出す幾発もの蹴りをエターナルに浴びせる。

少なくとも、目で追える速度ではない。

そして、数秒後にトライアルメモリのストップボタンを押した。

「9.9秒。それがお前の絶望までのタイムだ」

それと同時に蹴りを止めた。

そしてエターナルは大爆発を起こした。

だが。

「一体どういうことだ・・・」

アクセルトリアルは倒したはずのエターナルに向き直った。

「いい腕だ。お前は合格だ」

エターナルの声。

しかし、その声はアクセルトライアルの後ろから聞こえた。

我に帰ったアクセルトライアルは後ろに振り向いた。

「貴様……どうやってかわした……」

「簡単だ。ダミーメモリのマキシマムドライブで幻覚に攻撃させただけの話だ」

ダミーメモリとは偽物の記憶を内蔵するメモリ。

自らの容姿を変化させることもできるが、万物を変化させることも可能だ。

「次は外さん……」

アクセルはトライアルを解除し、謎のアダプターをアクセルメモリに取り付けた。

「ACCEL! UPGRADE!」

そしてそれをドライバーに装填しようとしたが。

「待て。オレはこれ以上闘うつもりはない」

エターナルは変身を解除し、戦闘の意思がないことを示した。

「どついつ意味だ！」

だがアクセルは警戒を解かず、変身も解いていない。

「そのままの意味だ。オレはお前たちの知る大道克己じゃない」

いきなりの停戦に加え、自らをまるで別人のように言う。

「・・・詳しく説明しろ」

事情の飲み込めないアクセルはとりあえず変身を解いた。

そして、克己は説明を始めた。

「まず、オレは確かに大道克己だが、お前たちの言う大道克己ではない」

「そしてオレはNEVERでもない。普通の生きた人間だ」

「生き返ったわけでもない。オレは別次元の・・・」

そこで一度区切りをつけた。

「平行世界の大道克己だ」

平行世界。

関係や性格や状況は違うが、同じ人物の暮らす複数の世界。

それが平行世界だ。

「そんな事が信じられるか」

「じゃあオレが今お前の目の前にいる事実をどう説明できる?」

「だが……」

「オレはこの世界のライダーを試しに来たただだ。そしてお前は合格だ」

「試すだと?」

「ああ、今、この世界だけじゃない。全次元に危機が迫ってる」

「全次元……だと?」

次元の危機、それが示すのは少し昔の出来事と同じ結末。

ディケイドが防いだ世界の滅亡。

それがまたしても迫っているということだ。

「ああ。それを防ぐのにお前たちの力を借りたい訳だ」

「お前が世界を救いたいだと……?」

照井の知る「大道克己」とは、極悪非道の大悪人。

世界を救いたいなど、思いもしない発言だろう。

「あのかな……」

克己は少し間を開けて続けた。

「……この世界のオレがどんな人間だったかは知らないが」

「オレは別次元では正義の仮面ライダーなんだぜ？」

仮面ライダーエターナル。

この大道克己の変身するエターナルは別次元では正義のライダーらしい。

「加えて言うなら、オレの世界にはお前らはいない」

「なるほど……大体事情が掴めてきたな」

「そういうことだから。協力しろ」

「……いいだろう。だが左はいいのか」

「アイツは初めから合格だよ」

克己は少し爽快そうに応えた。

「なぜだ？」

照井の質問に、克己は静かに応えた。

「だってアイツは……この世界のオレを倒したんだろう？」

自分を倒せるくらい強ければ問題はない。

そついう意味なのだろう。

「なるほどな……」

「誤解を受けたままじゃ気分が悪い。お前からアイツに説明してくれ」

「分かった」

こうして2人の戦士は探偵事務所に戻った。

~~~~~

「おい……照井……」

翔太郎は克己を警戒している。

「興味深い……」

フィリップも翔太郎と共に事務所にいた。

「安心しろ、左、フィリップ」

照井は克己の一步前に出て事情を説明した。

そして翔太郎は理解し、納得した。

だが、フィリップは克己にいくつか質問をした。

「なぜキミはこの世界に来れたんだい？」

エターナルメモリに次元移動の効果はない。

克己の所有する26本のメモリにもそんな効果はない。

フィリップの疑問も当然と言える。

「パラレルワールドメモリ……」

「何だつて？」

「パラレルワールドというメモリを使う奴に飛ばされた」

「飛ばされた……ということは自分の意思でこの世界に来たわけでは」

「ない。単なる偶然だ」

「概ね把握した。では最後の質問だ」

フィリップは目をそらさずに聞いた。

「パラレルワールドメモリの所有者は、今どこにいる」

「……」

克己は言葉を濁した。

それが何を意味するか、フィリップには分かっていた。

「どこにいる？」

「ライダーの居ない世界……」

克己は続けてこう言った。

「ネクストと呼ばれる戦士が、平和を守る世界だ」

滅亡は始まったばかりだ。

そして、この出会いは序章でしかない。

これから続く、悪夢と滅亡の……

く現れたEノ平行世界のライダーく（後書き）

こんにちは。

書いてみましたが、いまだに虎鉄さんは出ません。

次回は虎鉄さん中心エピソードになります。

次回・ヒーローWノ出会う戦士達。

〜ヒーローWノ出会う戦士達〜（前書き）

今回はタイガーさん達主体で書きます。

ごゆるりとお楽しみください。

・・・

まあ、始まったばかりなので。

## 〜ヒーローW / 出会う戦士達〜

？ワイルドタイガーの次元？

そこは悪の蔓延る街・シュテルンビルト。

そこでは日夜犯罪者が横行し、それをヒーローが捕まえる。

それをテレビ中継し、犯人逮捕劇を放送する。

ヒーローTV。

ヒーローは今も犯罪者を追いかけている。

そして場所はシュテルンビルト中心部。

現在、そこには2人のヒーローと1人のドーパントがいた。

ワイルドタイガー、そしてバーナビー・ブルックスJr。

ヒーロー初のコンビヒーローとして活躍する、有名なヒーローだ。

そして対するは。

「クソっ！ここにもお前らみたいのが居たのか！」

パラレルワールドドーパント。

タイガーとバニーが追いかけているのは、パラレルワールドドーパントだった。

ネクストの大量殺害。

それがパラレルワールドドーパントの罪状だ。

正確には6人のネクストの殺害。

「オイッ！待ちやがれ、殺人犯！」

そう叫ぶワイルドタイガー。

タイガーは能力を発動していない。

ワイルドタイガーのネクスト能力・ハンドレッドパワー。

5分間、身体能力をすべて100倍にするという能力だ。

だが、タイガーは長年に渡る激戦により、能力が減退している。

現在の能力発動時間は1分。

そのために、ワイルドタイガー・ワンミニットと呼ばれている。

「あなたはもう逃げ切れません！大人しく投降してください！」

そして今投降を呼びかけたのはバーナビー。

ネクスト能力はタイガーと同じく、ハンドレッドパワー。

まだ若いために、きつちりと5分間の間、身体能力が上昇する。

だが、ドーパントは逃げ続ける。

「クソっ・・・あと1人なんだ・・・あと1人・・・」

誰にも聞こえない声でそう呟いた。

すると、ドーパントの目の前に誰かが現れた。

「お前は!?!」

ドーパントは目の前の人間に掴み掛ろうとした。

だが。

グイッ!

「お前の能力、もらい受ける」

逆に首を鷲掴みにされてしまった。

ドーパントはジタバタと腕をはずそうともがいている。

「やめ・・・ろっ・・・お前・・・は・・・」

ドーパントは途切れ途切れで言葉を発する。

すると謎の人間の手が青白く光り、何かがドーパントから流れ込ん

でいく。

「ぐっ……お前……」

そして、やがて光りは収まった。

「礼を言う」

謎の人間は一瞬で姿を消した。

何が起きたのかは、ドーパントと謎の人間以外にはわからない。

「ハアっ……ハアッ……クソっ！」

ドーパントは自分の拳を地面に叩きつけた。

「おい、もう逃げられねえぞ」

「大人しくしてください」

いつの間にか、ヒーローはドーパントの背後まで来ていた。

謎の人間とのやり取りの間に追いついたのだ。

「こんな所で捕まるくらいなら……」

ドーパントはすぐそばの建物に手を押し当てた。

すると、その建物の壁が円状に歪んだ。

「あばよ！」

ドーパントはその歪みに飛び込んだ。

「あつ、待ちやがれ！」

躊躇うことなくタイガーも飛び込んだ。

「虎鉄さん！」

タイガーを追いかけて、バーナビーも歪みに飛び込んだ。

その歪みの先には……

？仮面ライダーWの次元？

そこは風都の中心部。

その場所には左翔太郎・照井竜。

そして変身したエターナルがいた。

「この辺りだな」

そう言うと、薄く黒いメモリを取り出した。

「ZONE！」

ゾーンメモリ。

それは空間の記憶を内蔵されたメモリだ。

そしてエターナルはゾーンメモリをエターナルエッジのマキシマムスロットに差し込んだ。

「ZONE！MAXIMUMDRIVE！」

ゾーンメモリのマキシマムドライブ能力。

それは周りの空間の歪みや変動を感知できる。

克己が何故これを行なったかは数時間前の地震が原因だ。

「もしかしたら次元地震かもしれない」

そう思った克己は中心部まで移動して、調査を始めたのだ。

そして、それは的中した。

「！」

克己はゾーンメモリをエターナルエッジから引き抜くと、すぐに変身を解除した。

「おい、どうしたんだ？」

翔太郎が未だ半信半疑で聞いた。

「北に4km、そこにパレレルの奴がいる」

エターナルはゾーンにより、調査を終えていたのだ。

すでに相手の所在地はつかんでいる。

「アクセル、お前が一番早いだろ。先に行ってくれないか」

「分かった」

照井は素早くドライバーを装着し、アクセルメモリを構えた。

「ACCEL！」

「変・・・身っ！」

そしてアクセルに変身し、バイクモードという形態に形態変化させ、急いで目的地に向かった。

「オレ達も行くぞ」

克己はアクセルの後を追いかけた。

「あっ、おい！置いてくなよ！」

その後を翔太郎が追いかけていった。

~~~~~

場所は風都の北方面。

そして、その周辺の公園の草影。

そこには傷ついたパラレルワールドドーパントが居た。

「まったく、あのバカヤローが・・・3人も一緒に次元移動できるかよ」

どうやら規定外の人数の次元移動を行なったために、ダメージを負ったようだ。

「パラレルワールド！」

ガイアメモリの音声が流れ、変身を解除した。

どうやら変身していたのは男のようだ。

「・・・まあとりあえずこの世界なら安心か・・・」

男は安堵していたようだ。

しかし。

「見つけましたよ」

男の背後から誰かが声をかけた。

その声の主はバーナビーだった。

「てっ、テメエ！なんで無事でいやがる！」

男は草影から飛び退いて、走って逃げた。

「これでも高いヒーロースーツなんでね」

そんな皮肉を言いつつ、バーナビーはすぐに男に追いついた。

「さあ、観念してください。もう完全に逃げ場はないですよ」

バーナビーが男に掴み掛ろうとした。

その刹那。

ギンツッ！

バーナビーの手が何かに弾かれた。

そしてバーナビーの目の前には、紅い装甲を纏った者がいた。

「お前がパラレルワールドドーパントか……」

アクセルが目の前のバーナビーに向けて言った。

バーナビーの手を弾いたのはアクセルのエンジンブレードだった。どうやらバーナビーをパラレルワールドドーパントと勘違いしているようだ。

「あなたは何者ですか？その男の共犯者ですか？」

バーナビーは突然現れた謎の紅い装甲の戦士に質問をした。

だが。

「俺に質問をするな」

アクセルはそれに応えることなく、エンジンブレードを構えた。

「……………どうやら愚問だったようですね」

バーナビーは話し合いを諦め、自身も構えを取った。

お互いにお互いを敵だと思いついでいる。

だが、2人には油断も隙もない。

本物のパラレルワールドドーパントの男は2人の威圧感に喋り出せずにはいた。

「さあ……………振り切るぜっ！」

アクセルは掛け声と共に走り出した。

「ハンドレッドパワー……………発動！」

バーナビーも能力発動を確認し、走り出した。

これがヒーローとライダーの、初めての出会いとなった。

〜ヒーローWノ出会う戦士達〜（後書き）

今回はアクセルVSバーナビーのバトルを展開します。

次回・加速するAノスピードの闘い

く加速するAノスピードの闘いく(前書き)

さて・・・

3話目になります。

アクセルVSバーナビー・・・

正直自分でもワクワクする勝負です。

始まります。

く加速するAノスピードの闘いく

？仮面ライダーWの次元？

場所は風都北方面の公園。

そこには紅い装甲を身に纏った2人の戦士が居た。

仮面ライダーアクセルとバーナビーが激闘を繰り広げている。

「ハアツ！！」

アクセルが声を上げながら、エンジンブレードを振り下ろす。

「フンツ！」

だがバーナビーはそれを回し蹴りで弾き飛ばした。

そして、勢いそのままに回し蹴りをアクセルに浴びせる。

「クツ………！」

アクセルは間一髪で腕をガードに回し、直撃を防いだ。

だが勢いは止まらず、そのまま後ろに吹き飛ばされる。

「チツ………」

舌打ちをしながらエンジンブレードを地面に突き立て、膝を付くアクセル。

立ち上がると同時に走り出し、もう一度ブレードを横に薙ぎ払った。

「遅いつ！」

バーナビーは軽々とブレードをかわし、アクセルの懐に鋭い蹴りを放った。

「がつ……………」

アクセルは予想以上の衝撃に吹き飛ばされ、地面を転がる。

そして息を荒げながら、ゆっくりと立ち上がった。

「強い……………そして、速い」

アクセルは闘いながらもバーナビーの動きを測っていた。

そして、現時点ではバーナビーにスピードで劣る。

それを把握していた。

すると、アクセルはトライアルメモリを取り出した。

「TRIAL！」

ガイアウィスパーからメモリ音声の流れ、それをドライバーに挿入

した。

「変……身っ！」

アクセルの紅い装甲が弾け、黄色に、そして青色に変化した。

全身の装甲を軽量化した形態、アクセルトライアルだ。

「色が変わった……？」

アクセルの変化に、バーナビーも多少動揺しているようだ。

そもそもバーナビーは仮面ライダーを知らない。

なので、目の前の敵を悪のヒーローと認識していた。

だが、戦闘中に形態が変化する奴など見たことがなかった。

「ここからが本番だ」

トライアルは走り出す構えを取りながら言った。

「……僕が勝ったら、あなたが何者か教えてもらいますよ」

バーナビーはトライアルに向き直り、言った。

一瞬、空気が止まる。

「全てを……振り切るぜっ！」

走り出したトライアルは、目にもとまらぬ速さでバーナビーに近づいた。

そして、バーナビーが気づいた時には、トライアルは目の前に来ていた。

「なっ！」

トライアルの突然の加速に、バーナビーは完全に反応が遅れた。

「ハアアアアっ！！！」

マキシマムドライブはしていないが、全力で高速の蹴りを浴びせた。

バーナビーは防御する間もなく、直撃を受けて弾き飛ばされる。

「……………」

予想外のダメージに、声を上げることすらできない。

そして、膝で伏せる姿勢になり、立ち上がりきれずにいた。

「終わりだ。降参しろ」

アクセルは警戒こそ続けているが、追撃を加えようとはしない。

しかし。

「……………驚きましたよ……………」

バーナビーはよろめきながら、静かに立ち上がった。

やはりダメージは隠しきれないようだ。

「まさか、そんな小さなメモリを取り替えるだけで、そこまでパワーアップするとは」

トライアルへの変身はスピードが飛躍的に上昇する。

その分、通常時よりパワーダウンするのだ。

つまり、パワーアップしたわけではない。

「ここからが本番ですよ！」

バーナビーは能力をフルに使い、一気に加速した。

そしてトライアルの眼前にまで迫り、渾身の力を込めた蹴りを浴びせかけた。

だがトライアルは警戒を解いてはいない。

バーナビーの加速は予想していたために、防御しきれるはずだった。

「ぐあっ！ー！」

しかし、バーナビーの放った蹴りは直撃していた。

トライアルは、バーナビーの加速自体は予測できていた。

しかし、加速の幅までは予想しきれっていなかった。

想像を越える速度で放たれた蹴りは、トライアルを完璧に捉えた。

「これが………僕の実力です」

バーナビーはその場に膝をついた。

全力の反撃は、自身の身体にもダメージを与えていた。

「……上等だ………」

トライアルはバーナビーの蹴りが直撃したにも関わらず、すぐさま立ち上がる。

だが、トライアルの青い装甲は、胸の部分がほぼ砕けていた。

やはり尋常ではない威力だったようだ。

トライアルでは闘えないと判断し、メモリをドライバーから引き抜いた。

変身が解け、通常時のアクセルに戻った。

そして、アクセルドライバーのグリップを握った。

「ACCEL! MAXIMUMDRIVE!」

アクセルメモリのマキシマムドライブを発動させた。

アクセルの右足が紅いエネルギーで包まれる。

「！」

バーナビーはアクセルの空気が変わった事を感じた。

そして自身もすぐに立ち上がり、右足に力を込めた。

☆GOODLUCK・MODE!☆

グッドラックモード、それはバーナビーとタイガーのスーツに搭載される機能だ。

タイガーは右腕が巨大化するのに対して、バーナビーは右足が巨大化する。

バーナビーの右足が何重もの装甲に包まれ、巨大化した。

「さあ………振り切るぜっ！」

「これで……決めるっ！」

アクセルとバーナビーは同時に走り出し、翔んだ。

「アクセルグランツァー!!!」

「アトミックブレイク!!」

2人の必殺技がぶつかり合い、大気が揺れる。

拮抗する大量のエネルギーが相殺され合う。

しかし。

「うおおおおっ!!」

アクセルが残る限りの力を振り絞る。

バーナビーは体力を消耗しすぎている。

正面からぶつかり合えば、不利になるのは当然だった。

ひくっ……押し負ける……

一瞬、僅かにバーナビーの力が緩んだ。

「振り………抜くぜっ!!」

そして、アクセルの蹴りがバーナビーの蹴りを弾き飛ばした。

そのままアクセルは蹴りを1回転させ、バーナビーに浴びせかける。

しかし、アクセルの蹴りがバーナビーに直撃する直前………

☆GOODLUCK・MODE!☆

2人の頭上から、ヒーロースーツの機能音声が響いた。

グッドラックモードを使えるのはバーナビーの他には1人しかいない。

「ウオラアアアっ!!」

アクセルは頭上からの何者かの拳により、地面に叩きつけられた。

そして何者かはバーナビーを抱えて、着地した。

「今度はお前がお姫様だっこされたな、バニーちゃん」

白黒のヒーロースーツに緑のライン、バーナビーのパートナーヒーロー。

ワイルドタイガーその人だった。

「遅いですよ………虎鉄さん」

バーナビーはそう言うと、気を失った。

タイガーはバーナビーを公園の隅に座らせ、アクセルに向き直した。

「オイ、そこの赤いの」

なんともアバウトな呼び方だが、アクセルの事だ。

肝心のアクセルは、限界を超えるダメージを受け、地面に伏せていた。

「一体どういう理由で、バニーと闘り合ってたんだ？」

タイガーはアクセルの首を掴み、近くの木に叩きつけた。

しかし、アクセルからの返答はない。

意識も朦朧としているが、ダメージと疲労から喋ることができない。

「コイツらは・・・ドーパントじゃないのか・・・？」

消えゆく意識の中で、そんな事を考えていた。

その刹那・・・

「そこまでだ」

タイガーが声に目を向けると、白い装甲を纏った戦士が立っていた。

「どうやら誤解が生まれてるようだな・・・」

白い装甲の戦士はゆっくりとタイガーに近づいていく。

「お前もこの赤いの仲間か？」

タイガーはアクセルを押さえつけていた手を放した。

すると、アクセルの変身が強制解除された。

変身者のダメージによるものだろう。

「仲間・・・まあそんなところだ、タイガー」

白い装甲の戦士はタイガーの名前を知っていた。

「あん？何でオレの名前知ってたんだ。どっかで会ったか？」

「いや、初対面だ」

白い装甲の戦士はドライバーからメモリを引き抜き、変身解除した。

その顔は大道克己だった。

「とにかく、一度話を聞いてくれ。バーナビーの事はオレが詫びる」

克己はタイガーの目の前に立ち、そう言った。

重なる関係。

そして、お互いはお互いを深く知ることになる。

く加速するAノスピードの闘いく（後書き）

どうもです。

「アトミックブレイク？なんじゃそりゃ」

と思った人がほとんどでしょう。

あれはオリジナルです。

原作には登場していません（#^・^#）

次回・Hの集結ノ克己の仲間

くHの集結／克己の仲間く（前書き）

こんにちは。

少し久しぶりの投稿となります。

アクセルとバーナビーはほぼ相打ち。

タイガーとエターナルの接触。

始まります。

くHの集結／克己の仲間く

？ワイルドタイガーの次元？

場所はシュテルンビルト中心部。

そこではタイガーとバーナビーを除いたヒーローが激戦を繰り広げていた。

空中ではスカイハイが。

海の上ではブルーローズが。

車上ではファイヤーエンブレムが。

街の中ではロックバイソンが。

ビルの上ではドラゴンキッドと折紙サイクロンが。

黒いヒーロースーツのバーナビーと闘っていた。

「このゲス野郎がああっ！！」

街中で闘うロックバイソンが、思い切り相手に拳を入れる。

「今度はバーナビーのロボットなんか造りやがって・・・」

バイソンは相手が何者かを大体把握していた。

他のヒーロー達も、各々が大体を把握していた。

「H102」

黒いバーナビーは、闘いが始まる前にそう言った。

その昔、ワイルドタイガーに酷似したロボットが造られた。

その名はH101。

ロボながら凄まじい戦闘力を持ち、ヒーローを圧倒した。

一度はヒーロー全員が絶体絶命に陥ったほどの強さ。

結果として勝利したものの、その破壊力は計り知れない。

そして今回のH102。

名前からして、H101の後継機だろう。

しかし、H101の設計者とスポンサーは既に亡くなっている。

本来造られることは無い。

場所は変わり、あるビルの上。

その男は、以前ドーパントから何かを奪ったあの男だった。

「ヒーロー達、地獄を楽しみな」

~~~~~

?仮面ライダーWの次元?

場所は風都、北方面の公園。

そこには気絶している照井とバーナビー、そして向かい合う克己と  
虎鉄。

そして公園の隅に蹲る、パラレルワールドメモリを握った男。

この5人が居た。

「それじゃ、説明してもらおうか」

タイガーがそれなりにドスの効いた声で言った。

「その前に、少し待ってくれ」

克己はタイガーを待たせ、公園の隅に向かった。

その視線の先には、パラレルワールドメモリを握った男がいる。

そして、克己は男の目の前まで来た。

「そのメモリを返してもらおうか」

低い声で男に言った。

「だ、誰が返すかよ！」

男はメモリを体に挿入しようとした。

「いいのか？」

克己はさっきより低い声で尋ねた。

「メモリの使用は闘いの始まる合図だ」

克己はそのまま続ける。

「お前も知ってるだろうが、パラレルに戦闘能力はない」

「もし、オレと闘うなら覚悟しておけ」

「正義の味方でも、つい手が狂って骨くらい折っちまうからな・・・」

「およそ悪魔のような形相で、男に言い切った克己。

正義のライダーと言うものの、その性格は非情そのものだった。

男は恐る恐る、メモリを克己に渡した。

男の顔は恐怖で塗りつぶされていた。

「お前は どうしてこのメモリを盗んだ？」

「ネクストだよ……」

「何だと？」

「他人の能力を盗むネクストを殺すためだよ」

「どういうことだ」

「お前がネクストの次元に行ったせいで、パラレルの力がネクストに流れたんだよ！」

男は大声でそう言った。

「バカな……オレはネクストと接触はしてない」

「パラレルの力の大きさは半端じゃない、遠距離でも少しなら力を盗めたんだよ」

「それで、お前はメモリを盗んでネクストを殺していたわけか」

「悪いかよ、お前の尻拭いしてやったんだ」

「ふざけるな！」

克己は空気が震えるほどの大声で言った。

「何があっても、人殺しはだめなんだよ」

そう言うと、踵を返してタイガーの元に向かった。

タイガーは座り込んであぐらをかいていた。

「待たせたな」

「遅えんだよ」

タイガーは不満げに口を尖らせた。

克己もタイガーの目の前に座り込んだ。

「どこから説明しようか……」

克己は少し考えて、話し始めた。

「まず、何故オレがタイガー達を知ってるかから話そう」

克己がタイガーに説明した内容はこうだ。

克己は次元崩壊の危機を知り、別次元のライダーに協力を求めに行こうとした。

平行世界を移動できるメモリは「パラレルワールド」しかない。

そのメモリを使い、まずたどり着いた次元が、タイガー達の次元だった。

一般人を装い、ネクストの調査を行い、タイガー達を知った。

そして一度自分の次元に戻り、メモリをメンテナンスに出した。

そこを男に侵入され、メモリを奪われた。

その男のせいで、克己はダブルの世界に飛ばされた。

こういう経緯だった。

「なるほどなあ・・・まあ事情は分かったが、バニーが何で闘ってたかはどうなんだ？」

「それは本人達が起きてから、聞くしかないな」

2人が会話を続けている途中。

「おいっ！置いてくなって言っただろうが！」

翔太郎が公園にたどり着いた。

「遅かったな」

「遅かったな、じゃねえよ……ん？」

そこで翔太郎はやっとタイガーの存在の気づいた。

「ドーパント!？」

翔太郎は腰にドライバーを当てようとした。

「待て、この人はドーパントじゃない」

克己はドライバーを持つ翔太郎の手を止めた。

そして、翔太郎に数分かけて説明した。

「ああ、そうだったのか……」

翔太郎は克己の説明で大方納得したようだ。

「どうも、この街を守るヒーロー、仮面ライダーWこと左翔太郎です」

翔太郎はタイガーに向けて挨拶をした。

すると、タイガーもマスクを外した。

「いやどうもご丁寧に、シュテルンビルトのヒーロー、ワイルドタイガーこと鎬木・T・虎鉄です」

虎鉄も挨拶を返した。

3人は良い感じの出会いを果たした。

その後の会話を少しだけ覗いてみよう。

翔「へえ〜虎鉄さん、娘さんがいるんですか」

虎「ああ、まだ全然ガキなんだけどな」

克「その娘もネクストなのか」

虎「まだ完全にじゃないけど、まあネクストだな」

翔「じゃあ娘さんもいつかヒーローに？」

虎「いや、あいつには普通の女の子の幸せを味わって欲しいんだ」

克「良いオヤジを持ったな、その娘」

とまあそんな話である。

そして。

「とりあえず、2人を連れて事務所に戻ろうぜ」

翔太郎が提案をした。

「ああ、2人共ケガ人だしな」

克己はそう言うと、照井を肩に担いだ。

「事務所？そこに行くのか？」

虎鉄は疑問を抱きながらも、バーナビーを担いだ。

「ああ、別に歩いていくわけじゃねえから、担がなくてもいいぜ」

そう言うと、翔太郎は少し大型の携帯電話を取り出した。

そのケータイのボタンを何回か押した。

数分後……

「なんだ！？このデカイ車は！」

虎鉄は見たこともない装甲車に驚いた。

「コイツはリボルギャリー、俺の相棒のマシンだ」

3人はリボルギャリーに乗り込んだ。

「よし、じゃあ事務所に向かうぜ」

別次元の戦士達は和解し、お互いに理解した。

~~~~~

？仮面ライダーエターナルの次元？

場所は克己のアジト。

ライダーとして活動している克己にも、アジトくらいある。

そこには4人の人間が居た。

「克己ってアタシ達のメモリ持ったままだよね？」

艶やかな声の女性が言った。

「ああ、おかげで俺たちは変身不能だ」

その男性は銃の手入れをしながら言った。

「もう！どこに行ったのよ克己ちゃん！」

女性・・・ではなくオカマ言葉の男性が言った。

「どうせすぐ帰ってくるんだろ、おとなしく待ってるしかねえ」

頭にバンダナを巻いた男が言った。

彼らの近くのテーブルには、ロストドライバーが4つ並んでいた。

克己の本当の仲間である。

くHの集結／克己の仲間く（後書き）

・・・

どうも、書いてから気づいたのですが。

読みにくいですよ、これ。

後々修正するかもしれませんがご容赦ください。

次回・本当のP／4人の仮面ライダー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7975z/>

仮面ライダーW&TIGER&BUNNY

2011年12月29日13時53分発行